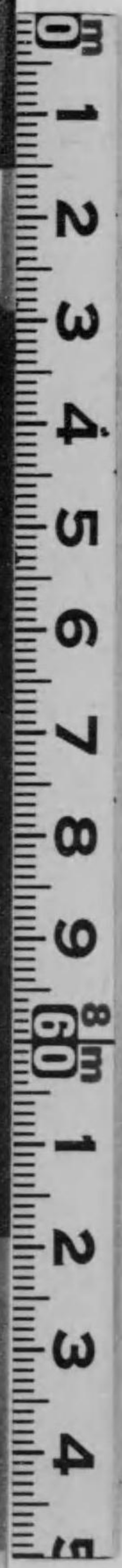


60

702

X

複写



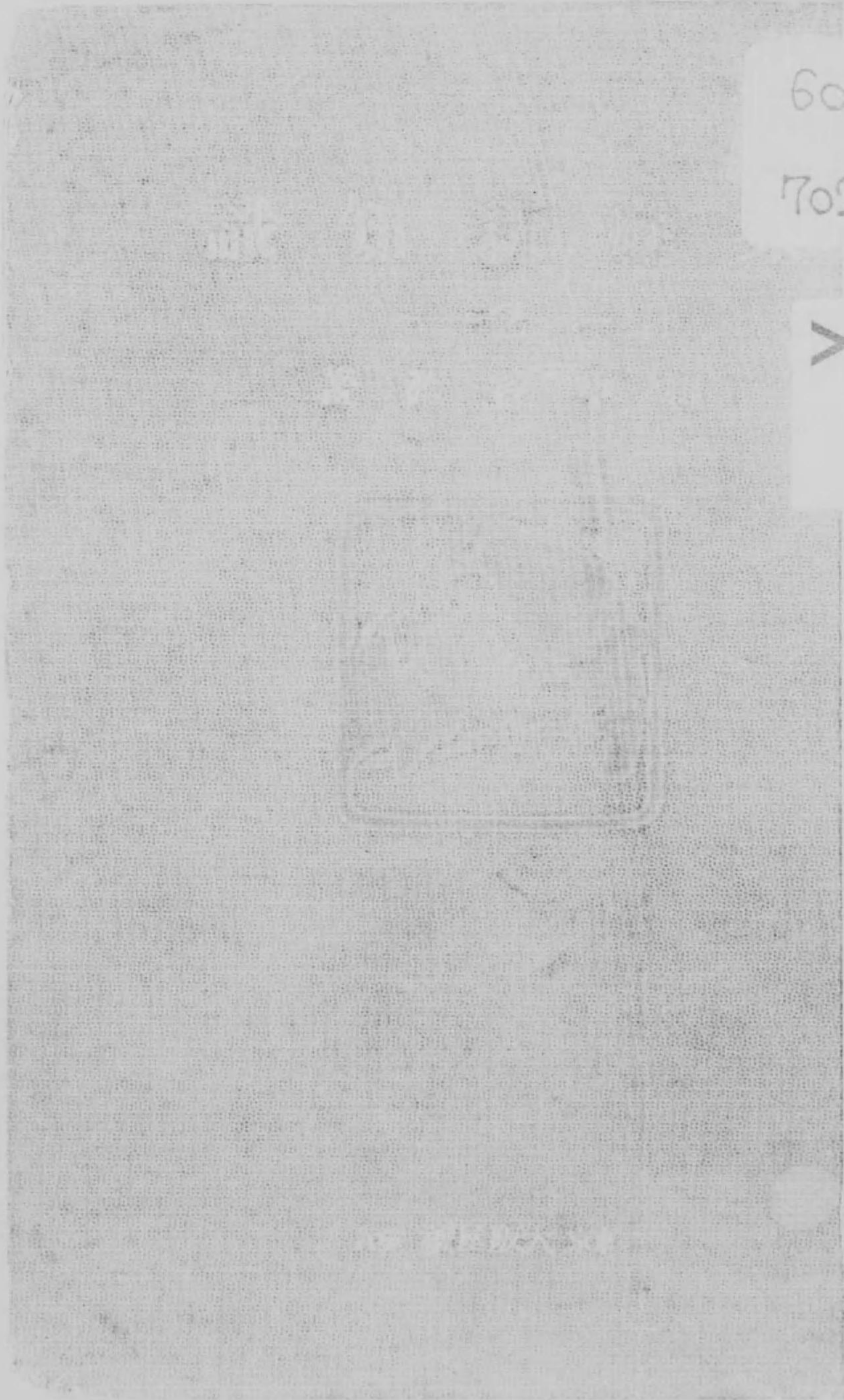
始



60

702

X



60-702

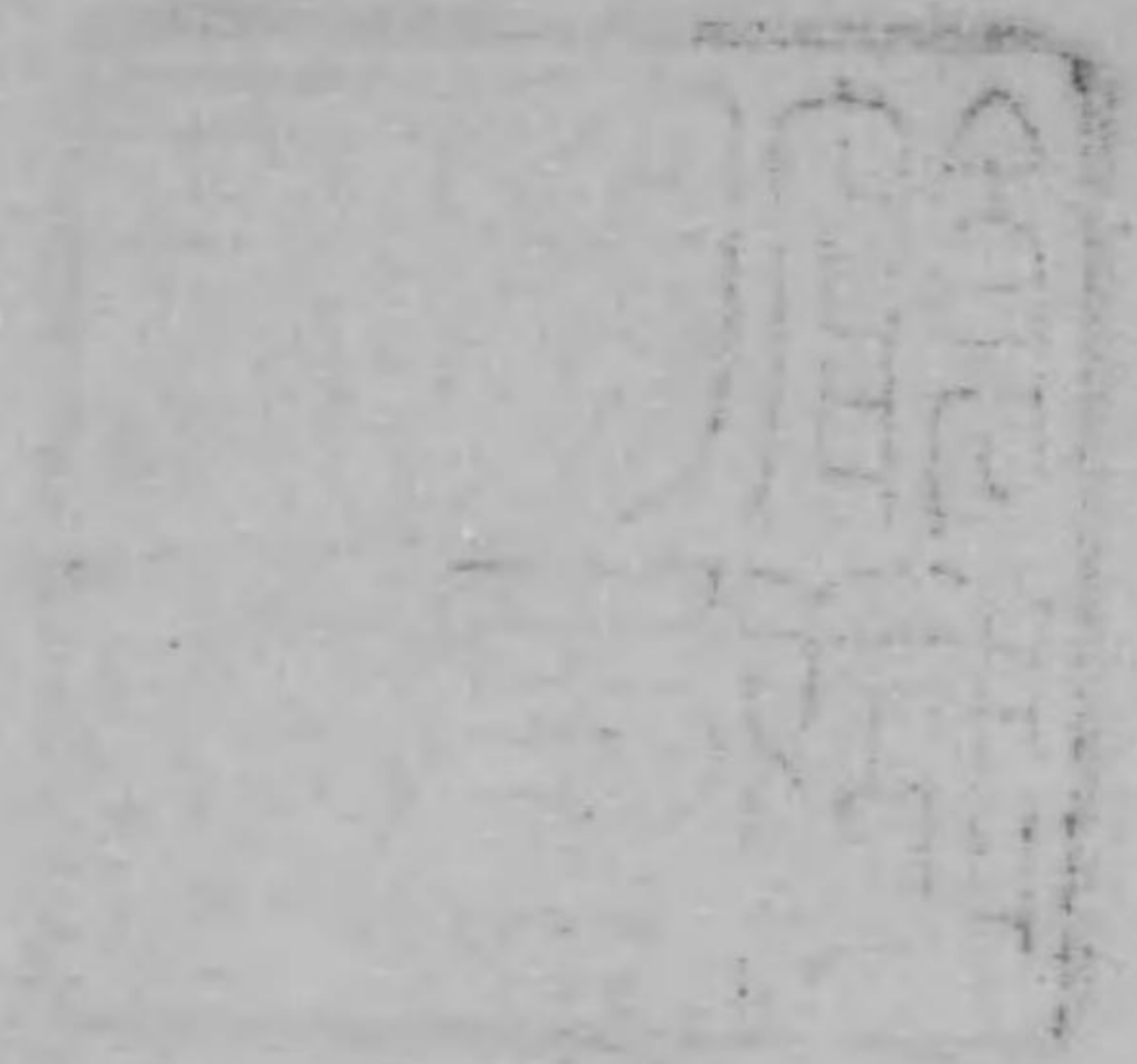
前大醫院醫學部教授
田中香涯著

家庭新知識

第二輯

東京大醫院發行

大正
10 3.22
內交



家庭新知識發行の緒言

歐州戰亂中、久しく輸入の杜絶せし獨逸の學術雜誌も漸く近頃になつて再び我國に這入つてきた、私共にとりては、さながら大旱に雨霓を仰ぎ驟雨に逢ひえたるが如き心地がする、一々讀んでみると、流石は學者の淵藪學問の王國たる獨逸だけあつて、新研究新發見の報告が頗る多い、あれ程世界戰爭に依つて一大打撃を受け疲弊困憊の状態に陥りながら、依然として學術の研究を怠らず、陸續新らしい研究を發表して世界の學壇に異彩を放ちつゝあることは實に驚嘆せざるを得ない、之を我國の現狀に比すれば天淵の差も嘗ならずである、そこで私は新刊の獨逸學術雜誌の記事の中から、一般の人々の讀んでも利益になるべき衛生療病上の新研究新事實を拮據し、通俗平易の文を以て之を我が國民の家庭にも紹介普及するの要あるとを切實に感じた、本書發行の動機は實に此に

ある、尤も我國にも家庭向きの書籍雑誌は可なり多く發行せられてゐるけれども、其の大部分は今に尙ほ低級趣味を満足せしむるに過ぎない平凡俗悪なもので、世界的新知識を紹述して家庭生活を改善し國民の衛生的思想を向上せしむべき書籍雑誌に至つては曉天の星辰も當ならぬ程乏少である、私が淺學非才の身なるをも顧みず、揣らずも本書の發行を畫することゝなつたのは畢竟上記の如き缺陷を充たしたいからで、東京の大坂屋號書店濱井氏に相談し其の快諾を得たる結果、愈々茲に本書の發刊を斷行することゝなつた。

本書は最初定期刊行の雑誌として世に出だす積りであつたが、出版者の方都合で、書籍とすることゝなり、毎月若くは隔月一回不定期に發行することに改めた、雑誌にしても書籍にしても、執筆者たる私に取りてはいつでも好い、衛生療病に關する世界的新知識を一般家庭に紹介普及するを得ば私の目的は達するのである。

本書は前述の如く主に新刊の獨逸學術雑誌の記事に據り、我國民に眼新らしむ新事實新研究を紹述するのが主要の目的であるが、併しまた我國の學者の研究した者でも正確或は確實に近いものは能ふだけ之を紹介するに努める積りである。

田中香涯識

家庭新知識(第二輯)目次

新 知 識

○ 生葱の根は健胃劑にして且つ虎列拉、赤痢、腸チフスの豫防藥なり……………一

○ 黴毒の再發(花柳病者拒婚同盟計畫の參考にまで)……………五

○ 結核病根治法の一方針(ステールツナー氏の新研究)……………八

○ 皮膚と免疫……………二一

○ 食物の蛋白質の選擇……………二六

○ カルシユームの效果に関する迷信……………三〇

○ 吐血の應急處置……………三九

雑 纂

○ 「デフテリー」と血清……………三三

○ 服用し易く且つ危険なき有効の下劑……………三六

○ 酸乳(ヨーグルト)に就ての注意……………三九

結核の食器傳染……………元

酒害と遺傳……………四

筋肉の活動と憐酸……………四

叢談

ラヂウム温泉の効驗と其理由……………四

喫煙史略……………四

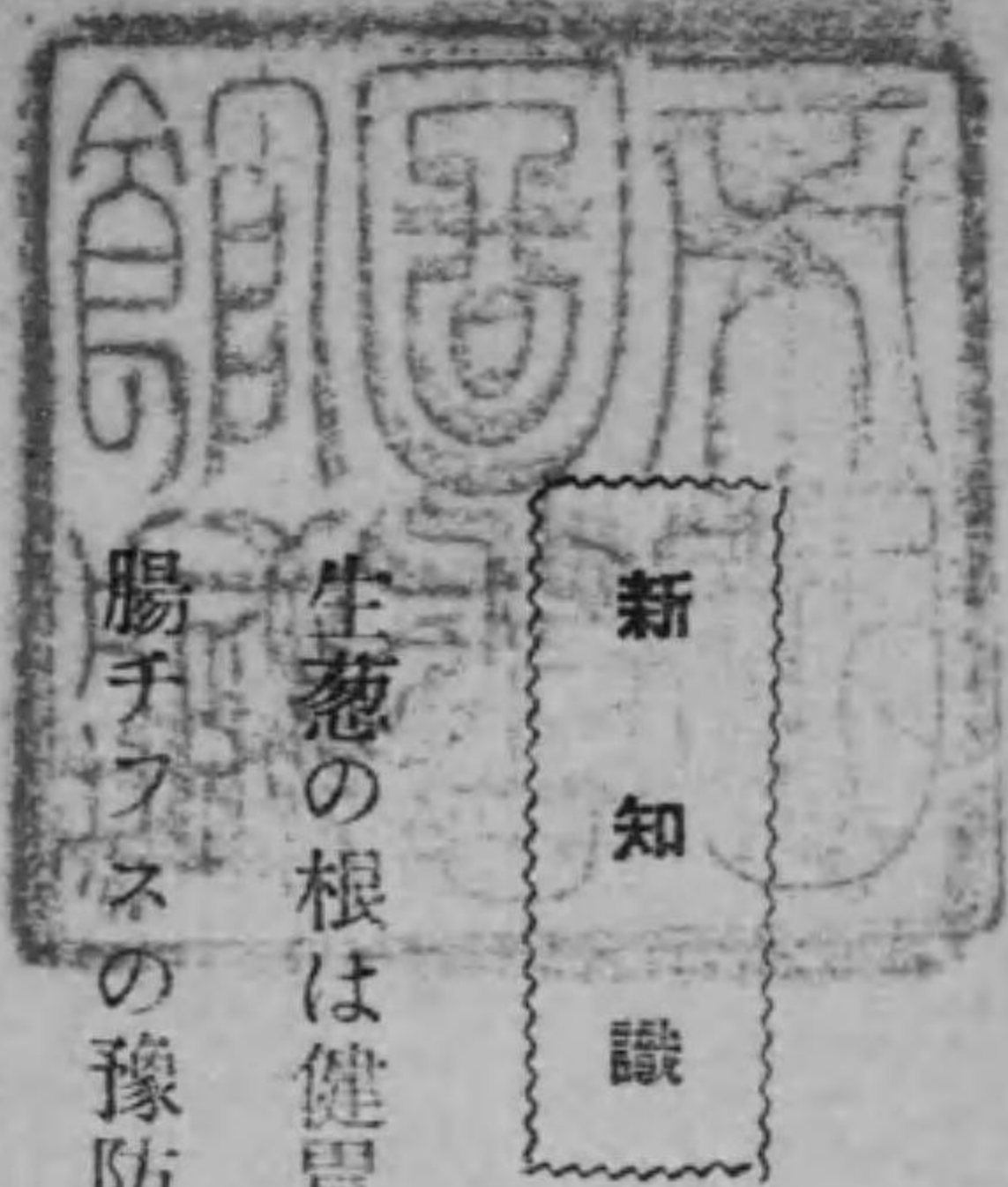
醫學上より觀たる胎教……………五

餘墨

女性の男性化（女性の解放運動に就て）……………六

家庭新知識 第二輯

香涯 田中祐吉著



生葱の根は健胃劑にして且つ虎列拉、赤痢、
腸チフスの豫防藥なり

歐洲戰爭の際、獨逸の醫學者ウィルブランド氏が、生葱の根が腸カタルに治功を奏し且つ赤痢病を豫防する力あることを認めて之に關する自己の觀察實驗を陸軍當局者に提供したことがあつたが、更に近時に至りて精密なる生理學的實驗を遂げ、其の結果を世に發表した。今其の要旨を左に紹述する。

生葱の根を細く切つて食物に混じて與へると、胃液の酸性が増し、胃液の分泌も多くなり、且つ胃に於ける消化の時間が長くなる。それ故、酸性の度の強くなつた多量の胃液は充分に食物に混和して之を完全に消化して仕舞ふ、されば生葱の根は胃液分泌の減少し且つ其の酸性の減退せる胃病患者に賞用すべき値あるのみならず、亦た、虎列拉、赤痢、腸チフスの豫防劑としても有効である。人の知るが如く、此等腸傳染病の原因たる細菌は一定度まで胃液によつて殺滅せられるもので、若し胃液の酸性が減じ或は胃液の分泌が衰へると始めて發育繁殖する機會を得る者であるから、胃液の分泌の増加し又た其の酸性の強くなれる者は、假令ひ、赤痢、虎列拉、チフスの細菌が體内に這入つても直ちに死滅して了ふ故、決して之に犯さるゝことは無い、生葱の根が赤痢、虎列拉、チフスを豫防する効力のあるのは、詰る處、胃液の酸性を強め、又た其の分泌を増加する作用のある爲めである。

それから又た生葱の根は前記の如く、充分に食物を消化せしむる作用があるから、其の食物は既に胃中に於て完全に消化せられた後、腸に往く故、決して腸を刺激することも無く、又た腸内に於て分解することも無い、是れ生葱の腸カタルに對して功驗を奏する所以であつて、即ち直接に腸カタルを治する力は無いが、腸の負擔を甚しく軽減するが爲め、既發の腸カタルを増悪すること無く其の治癒を促すやうになるのである。

さりながら、生葱の根の上記の如き作用は唯だ生の場合に限るので、若し之を煮たり或は灸つたりしたならば、其の効力を失ふことを忘れてはならない。

我國にては古來より、「そば」「うどん」及び或種の魚肉類に、細く切つた生葱をふりかけて喰ふ慣習があるが、恐くは自然の經驗から起つたものであらう。

今や獨逸の醫學者ウイルブランド氏によりて生葱の根の生理的作用及び醫療的効果の世に公にせられ、我國古來よりの民俗の衛生意義をも明かにすることの

出来たのは私共の快心に堪へざる處である。

以上概述せる處を綜括すれば、葱の根を生のみで細く切り食物に混じて食用すれば健胃の効があり、又た既發の腸カタルの治癒を促かし、且つ虎列拉、赤痢、腸チブスを豫防することが出来るから、一般の家庭に於ては須らく生葱の根を家庭常備の食品となし、時々之を用ゆるが宜しい、殊に胃病を患ふる者に於ては、高價不廉の胃病薬を用ふるよりも、生葱を食する方が、遙かに有効であり且つ經濟的である。又た赤痢、チブス、虎列拉患者に接近するものや、或は此等の傳染病の流行する際には豫防のため生葱の根を取るべきである。唯た茲に一言注意すべきことは胃病患者の中、胃液酸性過多症の者だけは生葱を食してならぬ事である。

微毒の再發

(花柳病者拒婚同盟計畫の参考にまで)

微毒は外觀上治癒しても、數ヶ月乃至二三年の後、復た再發することが尠く無い、それは畢竟、其の病毒が悉く消失せずして猶ほ體內に潜伏する傾向があるから、何かの機會に乗ると、其の潜伏せる病毒が再び勢ひを盛りかへしてくるが爲めである、而て微毒の病原たる「スピロヘーター」は如何なる處に潜伏してゐるか云ふに、一旦治癒したる陰部の下疳の癩痕や皮膚の發疹等であつて、外觀上では立派に治癒してゐても、此等の部の組織を取つて顯微鏡で検査してみると「スピロヘーター」の猶ほ死滅せずして残存してゐるのを證明せらるゝことが尠く無い、此等の事實に就ては、バシニー、アルニング、クライン、ホフマン氏等の認めた處であり、又た其の潜伏せる「スピロヘーター」が猶ほ依然として毒力を有つてゐることに就ては、サンドマン、フィシユル氏等の動

物試験に徴して明かである、而して近時に至てシユナイデル氏は「スピロヘータ」の骨組織内にも潜伏せることを認めた。

此の如き次第であるから、微毒なる病は外見上では立派に全治したやうに見えても、其の實は猶ほ病毒が体内に潜在残存せることが尠くない故、決して安心することが出来ない、而して醫者の方でも、病毒の潜伏してゐるか否かを確實に診断することは困難なる場合も多く、又た實際上不可能なることもある故、一旦醫者が全治したと診断しても其の後何ヶ月何年かを経つて再發するやうな病例も尠くないのである。

近時新婦人協會の平塚雷鳥女史は花柳病男子に對する女子の拒婚同盟を計畫し、花柳病の無きことを證明せる醫師の健康診断書を提出する男子に非ずんば結婚せぬことにしたいと云ふ提案を出して江湖の注目を惹きつゝあるが、併し前記の如く微毒の如きものは、一旦治癒したる後も猶ほ病毒の殘存潜伏するが

如きことも尠くないから、醫師が其の診断當時、微毒の徴候なき故を以て其人に健康診断證書を渡しても、その證書なるものは、畢竟微毒の徴候を發見することを得なかつたので作製したものであるから、確實に眞の事實を證明したものととは言はれない、若し此の如き證書によつて結婚の成立した後、微毒の再發した時には結婚を拒絶することになる譯であるが、併し健康證書の爲めに、却つて病毒に感染し、その結婚を棄却するに至るが如きは、折角の拒婚同盟の企畫も無効に歸する譯で、此の如きことは随分多からうと思ふ。

獨り微毒のみでは無い、淋病の如きも慢性のものとなれば、屢々其の徴候の明らかに認められないが爲め、實際上既に治癒したか否かを確實に證明することの出来ない場合もあるから、醫師の健康證明書に依頼するが如きは、畢竟花柳病の病理に通ぜざるが爲めで、そのため、却つて不測の危害を招く虞がある故、此の點から見ても拒婚同盟の計畫などには、私共は容易に賛成することが

出来ない。

結核病根治法の一方針

(ステールツナー氏の研究)

結核病には幾種の薬劑あれども、いづれも結核を根治することは出来ない、それは畢竟、結核の病原たる結核菌の抵抗力が強いので、之を殺滅することの不可能なるに由るのである。若し身體に左程の害も無く、單に結核菌のみを殺すことの出来る薬劑が発見せられたならば、茲に於てか始めて結核根治の目的を達し得られる、そこで吾人の今先づ考察しなければならぬことは、結核菌が如何なる譯で抵抗力の強いかと云ふ問題で、之を明らかにしなければ結核根治法の方針を案出することは出来ない。

抑々結核菌は人間の身體内に於てこそ強大なる抵抗力を具へ、諸般の殺菌性薬劑に遭ふても決して死滅しないが、然るに外界に於ては充分に發育する能は

ざるのみならず、日光に逢へば容易に死滅して了ふ、這般の事實は結核菌の抵抗力の何故に強いかと云ふ原因を考察する上に於て甚だ須要なることであるから、今先づ此の事に就て少しく論述するの要がある。

今試みに結核菌の培養を乾燥せしめて後、其乾燥質を化學的に検査してみると殆ど四十%までは蠟質より成りてゐることが判かる、而て此の蠟質は大約七十七%以上の蠟エステル、十四%以上の游離脂肪酸、七%以上の水溶性物質を含んでゐる、結核菌が幾多の化學的殺菌劑に對して強き抵抗力を有つてゐるのは、蓋し比較的少量の蠟質より成つてゐるからで、又た日光に逢ふて容易に死滅するのも、其の蠟質が日光のために直ぐ熔融するが爲めであらう、何となれば、結核菌の蠟質は攝氏四十六度の温熱によつて熔融するからである。されば日光の直射を受くる時は蠟質の容易に熔融することは明白なる道理であり、従つて其の熔融が結核菌の造構を破壊して之を死滅せしむることも亦自明の理で

ある、されば、結核菌の諸般薬剤に對して大なる抵抗力を有し、又た日光に對する抵抗力の頗る薄弱であるのは、畢竟其の内に比較的多く含有せる蠟質のためであるから、若し人體内に發育せる結核菌に對して其の蠟質を溶解すべき薬剤の見出たされたならば、之によつて結核菌を殺滅し、以て結核病を根治することが出来る道理である。這般の見地に立つて結核の新療法を思ひ立つたのは、獨逸ハルレー大學の教授ステールツナー氏である。

同氏は先づ密蠟、及び其他の蠟に就て之を溶解すべき諸種の化學的物質を檢索したる結果、脂肪酸エステルの最も善く之を溶解することを認めた、そこで此の蠟を溶解する性ある脂肪酸エステルをば、結核菌の培養物に混加した處が培養せられたる結核菌は、恰かもエステルを攝取して膨大せる蠟塊のやうになり、著るしく其の外観を變化した、仍りて豫じめ結核に罹らしめたる動物に、脂肪酸エステルを注射して實驗せしに、其の結果は期待に反して失敗に終つた、

併しそれは恐くは動物體が脂肪及び類脂肪質に富有なるが爲めである、何となれば脂肪酸エステルは、脂肪に溶解するものである故動物體内に注射せられたるエステルは大部分其の體内の脂肪中に溶解し、結核菌の蠟質に作用すべきものは極めて其の小部分に過ぎないからである、要するに脂肪エステルの効果なかりしは、エステルが、一方には蠟質を溶解すると共に、他方には脂肪にも溶解する性のあるからである、斯くしてステールツナー氏の研究も無効に終つたが、併し同氏の着眼點は甚だ面白い、若し近き將來に於て、單に蠟質のみを溶解し脂肪には溶解せざる特殊の化學的物質が見出だされたならば、始めて結核病根治法の曙光に接することが出来やう。

皮膚と免疫

從來皮膚の機能と云へば單に身體の外部を被覆保護し且つ所謂皮膚呼吸を

管むに過ぎないものゝやうに思はれてゐた、然るに近頃に至て皮膚には是れ以外に特殊の必要なる機能があつて一定の傳染病に對する免疫作用と親密なる關係の存することが分つてきた。

抑々皮膚に發疹を生ずる急性傳染病、即ち痘瘡、麻疹、猩紅熱、發疹チブス等を始め、慢性傳染病たる黴毒は一旦之に感染して治癒したる後は殆ど一生涯を通じて再感を受れ、所謂絶對免疫性となることは周知の事實である、此の如き事實は皮膚の作用と此等の傳染病の免疫との間に何か特殊の關係のあるやうに思はれる、這般の見解は既に千九百十四年ボンドルフ氏の世に公した所で、皮膚は身體外表の傷害を防ぐだけでは無く、又た内部の機關に對しても重要な保護機關であると云ふ説を唱へ出した、之に次で、イワン、プロホ氏は、皮膚は從來まで知られざりし必要の機能を有つてゐるもので、即ち生活に須要なる内部の機關をば病原菌より防禦し、又た既に毒力の弱くなつた病原菌と闘つ

て之を殺滅する役目を演ずる者であると云ふ説を公にした、而てホッフマン氏は此等の所説に賛成し、皮膚は諸般の病菌に打ち克ち且つ臓器を免疫たらしむる防禦性物質を形成して之を血液中に輸入する内分泌作用を営むものであらう、されば皮膚は單に外部防禦作用のある許りで無く、又た内部防禦作用を有するものであつて、急性發疹傳染病、黴毒等の感染後、絶對免疫性を得るのは畢竟之が爲めであるといふ説を公にした。

抑も皮膚より全體に影響を及ぼし、一定の傳染病を豫防し得ることは種痘が明らかに之を立證してゐる、是れ蓋し種痘によつて侵襲せられざる皮膚の局部に防禦性物質の形成せられ、免疫性の成立するに由るが爲めであらう、プロワチエツク氏の研究に依れば痘瘡の病原毒は皮膚と親和性を有するもので、試みに之を血液中に注入するに、二時間後には既に血中より消失し、其後には唯だ皮膚組織中於いてのみ證明せられる、而して一定の病原毒と結合親和する細胞

は則ち其の病毒に對する防禦性物質を生ずる源地である故、痘瘡の病原毒と親和性を有する皮膚の細胞が、之に對する防禦性物質を形成することは蓋し疑ふべくもない、又た麻疹、猩紅熱も、エジオネツク、ウンナ氏等の説に依るに、皮膚の上皮細胞に原發的の變性を惹起するものであるから、恐くは其の病毒も皮膚の上皮細胞と結合するものであらう、然らば則ち麻疹、猩紅熱の免疫も矢張り痘瘡に於けるか如くに皮膚に起因する免疫と看做さねばならぬ。

それから、皮膚の寄生病たる毛髮病に就て之を見るも、一たび之に感染して治癒したる後には局所免疫性を得るのみならず、一旦該病に犯されたる後、他に移植せられたる皮膚片は他の同一の疾病にも遠隔治療作用を及ぼすものである。此の事實に徴しても、皮膚の一たび侵襲を受けたる局所組織内には防禦性物質の形成せらるゝことが明かである、又た微毒に就て之を見るも、皮膚に強く發疹を生じたる場合には、其後神經中樞に微毒性疾患を來たすこと殆ど無く、

之に反して皮膚に發疹を生ずること少き病例にては、後年に至つて脊髄癱、進行性癱瘓の如き神經中樞の微毒性疾患を發起することが多い、又た第三期微毒に於て、皮膚の重劇に侵されたる場合には通常内臟微毒の起ることは無いものである、此の如き事實も亦た皮膚に於て微毒の病原に對する防禦性物質の形成せらるゝこと、及び皮膚發疹の防禦性物質を形成するに必要な病理的機轉たることを推知せしむるものである。

抑々皮膚に發疹を生ずる急性熱性病及び微毒に於ては一旦之に傳染して全治したる後、絶對免疫性となることは周知の事實である、而て其の中、獨り微毒の病原のみは、明らかに顯微鏡を以て目撃するを得べく、且つ陶器性の濾過器を濾過することも無いが、他の發疹性傳染病たる痘瘡、發疹チフス、猩紅熱、麻疹等に於ては其の病原は今尙不明であつて即ち濾過性のものである、又た微毒の病原たる「スピロヘーター」も、コルレー、ヘツチユ二氏の説に依れば其

の發育經過中に於て甚だ細微なる小體となり、濾過性となると云ふことである、此の如く絶對免疫を來たす處の種々の發疹性傳染病の病原が、いづれも濾過性のものであることは、吾人の注目に値する處で、恐くは濾過性の病原體は容易に血管から皮膚の上皮細胞に達することを得て、化學的反應を起し、以て組織免疫性の成立するの結果、絶對免疫となるのであらう、さればメンツエー氏の如きは、皮膚の内部豫防的防禦作用を以て皮膚の組織的免疫の一分微と看做してゐる。

食物の蛋白質の撰擇

從來多くの人々は、如何なる食物の蛋白質でも、其の營養上の價値は同等であつて、即ち牛肉の蛋白質も、魚肉の蛋白質も、米麥の蛋白質も、皆一樣同等に吾人の身體に同化するものゝ様に思ひ、従つて多量の蛋白質を含有せる食物ならば、其

の何たるを問はず凡て滋養強健の効力大なるが如くに信じてゐた、さりながら此の如き考へは近時に於ける新知識より觀れば全く間違つた見解であつて、如何に多量の蛋白質を含有しても、若し其の蛋白質の内に人體固有の蛋白質の構成に必要な「アミノ」酸の種類を異にし又た其の分量を異にしてゐるならば、其の營養的價値は頗る貧弱のものであることが分かつてきた、蓋し人間體の蛋白質と動物の蛋白質とは決して同一種のもので無く、各自特殊のものであるから、動物蛋白質を胃腸にて消化する際其の分解に由つて供給すべき「アミノ」酸の中から自體に適當なる必要なる材料を選んで人間體固有の蛋白質に改造しなければならぬ、これが則ち蛋白質消化の本來の目的であつて、即ち異種の蛋白質を自體の蛋白質に同化することが消化の真相である、而て蛋白質の構成原基たるアミノ酸の種類及び分量は各食物の異なるに従つて少からず差異がある故、若し食物の蛋白質を構成せるアミノ酸が自體の蛋白質のアミノ酸の構成と異なる場合に

は、其の食物は如何に多量の蛋白を有つてゐても、其の栄養上の價値は甚だ少く、到底それだけでは吾人の健康栄養を維持することは出来ない。

此の如く名は等しく蛋白であつても其の構成原基たるアミノ酸の種類及び分量は食物の異なるに従つて決して同様で無く、従つて人體の蛋白を補給すべき栄養的價値は各自大に異なるものである。今茲に各食物中の百瓦の蛋白が人體の蛋白の幾瓦に同化すべきかを知らしむるかために、ソーマス氏の研究成績を擧げてみやう。

| | |
|-----|-----|
| 馬鈴薯 | 七〇 |
| 米 | 八九 |
| 牛乳 | 一〇〇 |
| 鰹肉 | 一〇二 |
| 牛肉 | 一〇五 |

此の表に徴すれば、日本人の常食たる米の蛋白質百瓦の人體の蛋白に同化するべき分量は實に八十九瓦であるが、之に反して歐米人の主食物とする小麦の蛋白の同化量に至りては僅に三七乃至四九瓦であつて非常な懸隔がある、是に依て之を見れば、米の蛋白の方がパンの蛋白よりも栄養上の價値の大に優つてゐることが一見明瞭である。又た世人から下等の魚と蔑視されてゐる鰹肉の如き魚肉が牛肉と殆ど同様に大なる栄養價値を有し、其の蛋白の全部以上が人體の蛋白を補給することを見れば、これ程安價にして而かも滋養價の高き食品は他に尠からう、高價なる牛肉や魚肉等を食するよりも極めて廉價な鰹肉を食する方が、どれだけ経済的、どれだけ栄養的であるかも知れない。

| | |
|-----|--------|
| 豌豆 | 五六 |
| 小麦粉 | 三七乃至四九 |
| 玉蜀黍 | 三〇乃至四〇 |

以上の如き次第であるから、單に食物の蛋白質量やカロリー量の多寡等によつて食物の營養的價値を推定するが如きは大きな間違ひである、苟くも食物の異なるに従ひて其の蛋白質の人體に對する營養的價値に非常なる差異あることを認むる以上は、須らく先づ食物の蛋白を構成せるアミノ酸の種類及び分量に就て綿密なる注意を拂はねばならぬ。

カルシウムの効果に關する迷信

近年來、カルシウムは吾人の健康營養に非常の効果あるものゝやうに信ぜられ、之を常用すれば、長生不老の目的を達し得られるやうに説き立てる者さへ見受けられる、併し此の如きカルシウム崇拜の流行は、私共より之を見るに矢張り一種の迷信に過ぎない、仍りて茲に世人の迷夢を打破せんがため、東京帝國大學醫學部助教碓居龍太博士が「治療及處方」第十三號に公にせられ

たる「カルシウム製劑の効果に就て」の論文を根據として聊か論述を試むることとなつた。

カルシウムは人體に於ける必要成分の一であるから、若し之に不足缺乏を來たせば、健康營養の障礙の惹起することは固より言ふ迄もない、併し吾人の毎日取る處の混合食には既に相當のカルシウムを含有してゐるから、容易に其の缺乏を來たすの虞も無く、又た之を補給するの必要もないのである、學者の中、カルシウムの生理的必要性を力説する者は其の例を動物に取るが常であるが、併し此等の動物は人間のやうに自由に食物を選択して攝取することが出來ないが爲めに、カルシウム缺乏を來たし其の健康營養に障礙を生ずるに至るのであるから、之を人類に對する例證となすが如きは、全く其の對照を誤れるものである、唯だ人間に於ても、往昔の帆船航行、極地探検等の如き、或は最近の世界戰爭中、食物の封鎖を受けたる獨逸國民の如き、其の食料の種類

著るしく制限せられ、是を以て彼を補ふこと能はざるがために、彼の動物に於けると同一の結果を來たすことがあり、又た養育院收容者の如き、其の食物の劣等にして配合の科學的ならざるも自ら之を補足する能はざる者に於てのみ始めてカルシウムの不足現象を認め得らるのである、さり乍ら一般人間の混合食を取るものに於ては容易にカルシウム缺乏状態を生ずる事無く、又た之を補足するの必要なきことは理の看易き所であつて、レーブ氏の如き、從來食品の三要素たる蛋白質、含水炭素のみを尊重するを不可なりとし、カルシウムの之に譲らざるを説くは、多少一面の理由のあるにしても、甚しくカルシウムの効果を崇拜し、凡ての生活現象を以て殆どカルシウムの作用によつて維持せらるゝが如くに論じ立てるが如きは吾人の首肯する能はざる所である。

現今一般學齡の兒童に齲齒のおほき事實を擧げ、其の原因をカルシウムの不足に歸する學者あれども、碓居氏が東京養育院收容の兒童千餘人に就いて調

査せる結果に依れば、兒童の食品中、蛋白、脂肪、含水炭素の不充分なると共にカルシウムの不足も亦た甚しく、之がために兒童の身長矮小にして、之を同年の一般兒童に比すれば數年後るゝの觀あるに拘はらず、此等の兒童に殆ど齲齒を認めざることは吾人の驚異とすべき處で、碓居氏は其の原因として、兒童の食品中、肉類の極めて稀少なること、間食として一般兒童の如く糖類を給與せられざることの二點に歸した、即ち彼等の憐むべき境遇は偶々其の齒牙をのみ強健ならしめたのである、若し齲齒の原因がカルシウムの不足に在りとするならば、此等の兒童には最も多く齲齒を見るべき筈であるのに、事實は全く之に反してゐる、蓋しカルシウム崇拜者はカルシウムの効果を擧げんがために、他に重要な原因のあることを忘れてゐるのである。

カレル療法に於ける牛乳の効果に關しても、牛乳中に含有せるカルシウムの作用に歸せんとする論者も尠く無いが、併し牛乳に代ゆるに重湯、葛湯を用ゐる

ても矢張り同一の効果のあるを見れば、カレル療法の効果は心臓機能の負擔減少と脱鹽との結果であつて、決してカルシウムの効果に非ることは明白である。

喘息に對するカルシウムの効果を稱する者も世に尠く無いが、併し元來喘息の發作は間歇性に起るのが其の特徴であつて、之を自然の経過に放任して置いても、發作の消退することは周知の事實であるから、喘息發作の將に減退せんとするの時期に、偶々或る藥劑を用ひて直ちに其の効果の良好なるを斷定せんとするが如きは輕率である、且つ喘息患者は暗示的影響を受け易く、稍々異なる療法を行へば、一旦其の發作は止み、患者は其の効果を喜ぶけれども、之を反覆して行へば無効に終るが常である、或論者はカルシウムによつて喘息發作を頓挫せる後、數年再び治を求めないのを見て之を持続的治療の證左とする者もあるが、併し患者は其の發作の再發する時には、舊療法を信ぜずして他

の療法に走るが爲めで、再三同一の療法を求むるが如き耐久力を喘息患者に認めんとするが如きは、蓋し喘息患者に對する觀察の足らざることを示すものである。

皮膚病及び血清病に往々カルシウムの著効を奏するが如き事實あれども、併し此等の疾患は由來一時的のものであるから、其の結果を斷定するには周到なる注意を要しなければならぬ。

今日カルシウムの治療的應用の最も盛んなるは肺結核である、ツベルクリンに失望し、あらゆる古來の療法に望みを絶ちたる醫家は争ふてカルシウムに走り、更に之に配するに沃度を以てし、之に依て結核病を根絶せしめ得るかの如くに信じてゐる様である。

碓居氏は數年前より結核病に對するカルシウムの効果如何と應用の範圍とを知るべく種々の實驗を試みた。

咯血に對する効果は、從來の止血薬に比して遜色なく、五乃至一%溶液一〇珎を用ひて或程度の効果を認め、併し是れ獨りカルシウムのみならず、同一濃度の食鹽溶液も亦た同等の効果が有り、殊に急速の効を求むる場合には寧ろ食鹽の効力多きことを知ることが出来た。

次で、古來カルシウムの結核に對する作用として其の病竈を石灰層によつて包圍し、周圍部と遮斷して死滅せしめ石灰化する事が重要視せられてゐるが、果して其の事實なるか否かを確かめんかために、長時日に亙りて實驗を行つた處が、カルシウムの注射及び吸入は毫も結核病竈の石灰化に與らずして、カルシウムは單に一時性に沈着するに過ぎず、復た速に體外に排泄せらるゝことを證明することが出来た。即ち健康なる動物にカルシウムを與へて後、之を結核に罹らしめ或は先づ結核に感染せしめた後、カルシウムを與へ、種々の時期に於て動物を撲殺し、精細に組織を鏡驗するに、少しも石灰化の形

跡を認むること能はず、或は結核患者に數年に亙つてカルシウムを與へ、死後之を解剖するも亦た石灰化を認めることが出来なかつた。

カルシウムの内用は單に一時的効果を呈するのみで持久性なく、組織の石灰化はカルシウムの注射又た吸入によつて招來すること能はず、従つて從來信ぜられたるが如き石灰の結核治療機轉は組織の石灰化に求むる能はざることが判つた、而てカルシウムの効果其者は畢竟喰菌作用の促進にあるから、之によつて結核菌を破壊して其の毒素を無力たらしめ、他方に又た蛋白質の消費を減じて榮養を増進し、延ひて益々體細胞の喰菌作用を旺盛ならしむるにあるを以て假令ひ結核病に効果ありとするも、豫じめ體細胞の機能活潑なるを要するものであるから、患者の榮養尙ほ良好なる時期、即ち結核の初期、若くは慢性の経過を取りて急に榮養の損せざる病型に於てのみ多少の効果を示し得るに過ぎない、之を一日多くの醫家の行ふが如く、其の如何なる時期を問はず、羸

瘦極度に達し死に瀕するものに向つて尙ほ多量のカルシウムを用ひて効果を
 收めんとするが如きは、其の何の故なるかを知らず苦しむるを得ない。
 カルシウムを初期結核患者に用ひて數ヶ月を経る時、榮養の著るしく良好
 となりて肥満し、皮膚紅を潮するに至るを見るは、一に蛋白質の消耗を減する
 の結果である、然るに血色の良好となるのを血色素の急速に増加するがためな
 りとして之を臨牀的に報告する者もあるが、吾人は毫も此の事實を認むること
 が出来ない、寧ろ一般榮養の増進せる結果に歸するの至當なるを信ずる。
 神經疾患に對する効果の如きも、初めは甚しく誇張せられ、之に附和雷同せ
 る報告の相次で發表せられ遂に今日の流行を見るに至つたのである。
 一藥物によりて凡ての疾患を治せんとするは、恰も罂粟の大樹を搯がさんと
 するに似、萬病一藥の傾向は疾病に對する研究心を怠らしむるのみならず、醫
 家の墮落を甚たしからしめんとするものである。

以上は碓居博士の論旨を祖述せるもので、私共の大に共鳴する處であるから、
 今日見るが如きカルシウム崇拜の迷信を幾分なりとも打破せんがため、茲に
 之を紹介するに至つた次第である。

吐血の應急處置

胃出血即ち吐血は屬々起る處の病症であるから、一般家庭に於ても之に對す
 る應急の心得だけは知つて置く必要がある、今こゝにルドルフ、デツケル氏が
 最近ミュンヘン醫事週報に發表せし「吐血の療法に就て」の論文中より素人で
 も心得て置くべき個處を抄出することにした。

抑々吐血は胃潰瘍、胃癌より起るものであつても、又た其他の原因より起る
 者であつても、其の度に著るしい輕重の別があつて、最も輕微なる吐血では肉
 眼ではハッキリ見えず、化學的検査によつて始めて證明せられたるに過ぎない

が、最も重症なる吐血に至りては其の量が甚しく夥多であつて、如何なる療法を施しても無効に終るものである。

軽度及び中等度の吐血ならば、患者を全然安静ならしめ、又た食餌を厳禁し或は單に牛乳の如き流動食のみに限つて置けば、通常は之は自然に放任しても暫時の後に出血は靜止する、それ故、軽度の吐血ならば別に醫藥を用ふるの要は無い、之に反して生命に危険なる重症の吐血にては、能ふだけ速に醫治を請はねばならぬことは勿論である。斯る場合には患者を絶對的安静にして仰臥位を取らしめ、胃部には氷嚢を當て且止血劑を用ひなければならぬ、之は固より素人の爲すべきことで無く、醫師の手を藉るべき事であるが、素人も亦た心得て置く要がある故、其の應急療法を述べると、普通の止血劑たるクロール鐵や、ヴィスミート等の如きものは重症の吐血に對しては殆ど何の効もない、此の場合に於て最も確實に功を奏するのは、かねて殺菌せる「ゲラチン」(膠質)の皮下注

射でも、ゲラチンは血液の凝固性を高めるものであるから、之を注射すれば全身血液の凝固性の増加するがため、胃からする出血も自然に停止するやうになるのである。併し此の「ゲラチン」の作用を一層強くして早く吐血を靜止するには、「クロール、カルシウム」を併用するが可い、又た「ゲラチン」と「クロール、カルシウム」とを豫じめ結合せしめたる、「カルチン」Kaltineといふ藥劑もある、その他、重症の吐血に効果のあるのは「クロール、カルシウム」を混和せる食鹽水の靜脈内注射である、此等の藥劑の分量に就ては、素人の知るの要も無く、又た假令ひ之を知つてゐても、素人の手で爲すべきことで無いから、茲にはわざと省略して置く、之を要するに軽度の吐血ならば、別に騒ぎあわてずとも、患者を嚴に安静ならしめ、且つ食餌を禁じ、或は少量の流動食のみを與へて置けば、自然に止血する故、急いで醫師を迎へるの要は無いが、併し稍強度の出血なれば、此の他に醫藥を施し、其の確實なる治療法としては、

「ゲラチン」或は「カルチン」の皮下注射或は「クロールカルシウム」混加の食鹽水の靜脈内注射を行ふの要がある故、能ふだけ、速に醫師を迎へねばならぬ。

雜 纂

(ヂフテリー)と血清

小兒の傳染病として人の熟知する「ヂフテリー」病にペーリング氏免疫血清の効果あることは何人も夙に認むる處であるが、近時獨逸の醫學者マイエル氏が「獨逸醫事週報」千九百二十年度三十八號の紙上に公にせる處に依れば、輕症の「ヂフテリー」には別にペーリング氏の免疫血清を注射せずとも、通常の馬血清にても効果がある、但し中等及び重症のものには、ペーリング氏免疫血清を用ひねばならぬと云つてゐる。

服用し易く且つ危険なき有効の下劑

下劑にはいろいろあるが、其中、服用し易く且つ危険の殆ど絶無なるものは「フェノールフタレイン」 Phenolphthalein である。此の藥劑は帶黄白色なる無臭無味の藥で、水には全く溶解せず、又た酸類にも不溶性であるから、胃に於て變化を受けず、從つて胃加答兒の患者にも適してゐる。是れ他の下劑に優れる點で、腸に至るや、アルカリ性の腸液に逢ふて分解し、以て瀉下の作用を呈するのである。而て本劑は僅かに吸収せらるゝ許りで、其の内服せる者の太約八十五%は大便中に排出せられる故、假令ひ血液中に吸収せらるゝにしても、危険なる副作用は無い、尙ほ本劑の特長は、無味無臭であるから、服用しやすく、少量にて瀉下の効を奏し、殊に、ボンボン（菓子）の形とせば、小兒、精神病者にも容易に服用せしむることが出来る。本劑の用量は大人にては一回

量〇、一乃至〇、二瓦、小兒にては〇、〇六瓦である。併し一回〇、五乃至一瓦を大人に與へても何等の危険とてなく頑固なる便秘には更に増量しても構はない、内服後六乃至十二時間にして軟便の排出を來たすから、就寢前に頓服するが可い、其の用法は散劑又たは錠劑とし、錠劑は小兒精神病者、其他いづれの者にも便利である、其の處方の一例として小兒の口に適する甘き錠劑の處方を左に記しておく。

- | | |
|-------------|-------|
| フェノール、フタレイン | 六瓦 |
| サツカリン | 〇、一二瓦 |
| ワニルラ丁糖 | 一、五瓦 |
| カ、オ | 三瓦 |

右錠劑百個となし、一回數個、夜間頓服、小兒には一回一錠を與ふ。但し本劑を用ふる場合に注意すべきことは、糞便のアルカリ性の場合には

本劑のために赤色を呈する故、之を血液と誤信し驚きて醫師を訪ふことがあるから、豫じめ此點に於て注意して置くことである。

酸乳（ヨーグルト）に就ての注意

近來、ハイカラな人達の間には、健康長壽の藥だと云つて酸乳（ヨーグルト）を飲用する人が少く無い、酸乳とは、空氣中にある乳酸菌の作用によつて牛乳中にある乳糖が變化して乳酸を生じ、此の酸が更に牛乳中に溶存する蛋白質、カゼインに作用して之を凝固したものである。何が故に酸乳が健康長生の藥として飲用せらるゝに至つたかと云ふに、バルカン半島にブルガリヤ邊では、乳酸菌の繁殖せる乳汁を飲用する習慣があつて、同國の人口四萬人中、百歳以上の長壽者が四千人もあるといふ事實があるので、佛國の醫學者メチニコフ氏が、乳酸菌は腸内に繁殖する大腸菌の發育を制限し、従つて大腸菌の作用に

よつて腸内に發生する有機性毒物の量をも減少するがため、長生するのであると云ひ出して、同氏一流の不老長壽説の一證とした結果、此の説が世に廣まり、乳酸菌を培養したものをば牛乳中に入れて酸乳を作り之を愛用するやうになつたので、更に進んでは乳酸菌の製劑をそのままに内服するが如き次第となつた。「ラクスターゼ」「ピオフィエルミン」「グリコラクチン」の如き則ちこれである。

併し酸乳が果して上記の如き効能のあるか否かは容易に断定し得られない、固より腸内に生ずる有機性毒物の吸收が人體の健康を害することは疑ひなき事實としても、併し之れが果してメチニコフ氏の云ふが如き老衰の原因であるか否かは大なる疑問である、假りに數歩を譲つて、酸乳が不老長生の効能あるとしても、之を飲用するに當ては特別の注意を要する、それは外でも無い、牛乳を凝固するのは獨り乳酸菌のみで無く、他のいかなる細菌でも、大抵牛乳中

の「カゼイン」を凝固するものであるから、ヨーグルトと他の細菌の繁殖せる凝乳とは外觀上容易に區別することが困難である、尤も牛乳屋では乳酸菌を以てヨーグルトを製造するに逸ひ無からうが、併し牛乳屋には細菌學に精通せる技師が無いから、甚だ不安心である、だから坊間にヨーグルトと稱して販賣せるものゝ中に或は他の有害なる細菌が混じてゐないとも限らぬ、それに赤痢やチフスの細菌などは能く牛乳中に發育し繁殖する性があるから、餘程注意を要する次第である。

ヨーグルトは元來其の效果の確實ならざる者である、確實なる效果の認められない者は最初から飲用せぬがいゝ、況んや上記の如き危険も之に伴ふから迂濶にヨーグルトと思つて飲用しては恐るべき傳染病に取りつかれるかも知れぬ。メチニコッフ氏の所説を其まゝに盲信する上にもハイカラがつて効果の分らないヨーグルトを愛用するが如きは私共の取らざる處である。

結核の食器傳染

結核は空氣から傳染する許りで無く、又た食器の媒介によつて傳染することも尠くない、近時米國に於ける研究に依るに、結核に罹患せるモルモットの食器を洗つた水をば、他の健康なるモルモットに注射すると、全數の三分の一は結核に罹つて死亡する、食器を温湯で洗つたゞけでは病毒を洗ひ落すことは出來ない之れを證據立てる實驗として、試みに温湯で洗つた匙を水に浸し、その水を動物に注射してみると、全數の四分の一は矢張り結核に罹る、これで見ると、家庭或は飲食店では、結核患者の使用した食具は必ず十分に煮沸し或は消毒劑で嚴重に消毒しなければならぬ。

酒害と遺傳

近年來、酒類の遺傳に及ぼす影響に就て諸學者の實驗せし結果に徴するに、生殖能力は減退し、又た其の生兒に種々の發育障碍を來たすことは明かである例へば鶏卵中に少量のアルコールを注入し或は鶏卵を酒精の蒸氣内に放置すると、其の兒鶏は屢々種々の畸形を現はし、殊に神経系及び眼の發育障碍を起すことが多く、又た、海水或は淡水中に少量の酒精を混すれば、其水中には畸形的魚類の產生することが多い、又たアルリット氏の鼠に就ての實驗に徴するに少量の酒精を連日内用せしめると、動物の生産力減退し且つ生存期は短縮し、更に多量を與ふれば、兩性共に不妊状態に陥り、且つ生兒の死亡率も激増し、加之、生殖能力の減退は數代に亘りて遺傳すると云ふ、此の如く酒精中毒に陥りたる鼠を解剖してみると、毎常生殖器關に退行變性を證明し、睾丸の萎縮を

認めるとのことである。

筋肉の活動と磷酸

近時エムブデン氏の實驗に依れば、筋肉中には「ラクタチドゲン」といへる物質中に結合せる磷酸と、他種の結合をなせる磷酸、所謂「殘餘磷酸」とがあつて、此の磷酸の量の多ければ多い程、その筋肉は長く活動に堪ふるものである、磷酸は實に活動せる筋肉に對して重要な物質の一で、毎日五乃至七瓦の二磷酸ナトリウムを取る時は著るしく筋力を増加する、それ故、軍隊の行軍或は其他劇烈なる勞働を必要とする場合に磷酸を取る時は大なる効果があり、又た疾病の恢復期或は其他の疲勞状態に際して之を取る時も亦た大に効があらうと云つた、聊か参考のために紹介して置く。

談

ラヂウム温泉の効驗と其理由

吾國の俗諺に「お醫者さんでも有馬の湯でも。惚れた病は治りやせぬ」とあるが如く、温泉の諸病に効驗のあることは古來より世人の能く知つてゐる處で、殊に、草津、有馬、別府、道後等の温泉の効能は夙に人口に膾炙せられ之に浴する者、四時を通じて殆ど絶えることがない、海外に於ても諸病に効驗ある有名温泉亦た甚だ多く、南澳ガスタインの温泉を始め、獨逸のカル、スパート、チリツツシエーナウ、フランチェンバート、セント、ヨアヒムスタール、バーデンバーデン等の温泉の加き、特に著名なるものである。

處が温泉の諸病に効驗のある理由に至りては、ラヂウム、エマナチオンの

ほ未だ發見せられざりし迄は、主として温泉所在地の氣候空氣の清潔等に歸し温泉浴その者の効果は寧ろ之が副たるが加きものと看做されてゐたのであるが、近年に至りて、前記の歐洲諸温泉にラヂウムエマナチオンの發見せらるゝこととなつてから其の効驗の著るしき理由が始めて明白となつた。

抑々ラヂウムエマナチオンとはラヂウムなる元素より發出する一種の重い氣體である。即ちラヂウム化合物を熱するか或は之を水に溶かして空氣を送ると重い氣體が發生する。これが即ちラヂウムエマナチオンで、今日では之をニトロンと稱へ、一種の新元素と認められてゐる。温泉の効驗は畢竟此の氣體の作用に基くのであつて、即ち湯其者よりも湯より蒸散する瓦斯の中に多くのエマナチオンを含んでゐるから、之を空氣と共に體內に吸入し或は皮膚より之を吸收するがために効果を奏するのである。而して此のエマナチオンは何處から來るか云ふに、それは温泉所在地の土地中に存するラヂウムから來るのである。

ラヂウムとラヂウムエマナチオンとは其の人體に及ぼす作用が著るしく異つてゐる。即ちラヂウムの方は人體の組織を破壊死滅せしむる作用があり、之に反してエマナチオンの方は組織に對して刺戟的に作用し、新陳代謝を昂進する性がある。人體内には種々の醗酵素があつて、此のものゝ作用に依り新陳代謝の催進せらるゝので、其の中には組織を液化溶解する醗酵素もある、試みに人體より筋肉或は臓器の一部を取出して之を防腐的に放置すると、其筋肉や臓器は次第に溶解して了ふ、これは詰り筋肉、臓器中に存在する特殊の醗酵素の働きによつて、起る處の溶解現象で、之を稱して自家溶解といふのである、處が、エマナチオンは人體の組織内に存する自家溶解性醗酵素の作用を促進する性があるから、之が人體に作用すれば組織の溶解を促し代謝機能を昂盛するのである、ラヂウムエマナチオンを含有せる温泉が主として、慢性炎症性の疾患（慢性ロイマチス、慢性腎臓炎、種々の慢性カタル症）新陳代謝病（糖尿病、

痛風）及び神経痛等に効のあるのは實に之が爲めである。蓋し慢性的の炎症性疾患に於ては其の組織臓器に於ける間質結締組織の増殖肥厚し、官能障害を來たすものであるから、之にエマナチオンの作用する時は、前述の理由にて増殖せる結締組織の溶解を來たし、之を吸収し易からしむるがため、該疾患の輕快治癒するのであり、又た新陳代謝病、例えば痛風、糖尿病等に効驗あるのは、近世の知見に徴して明かなるが如く、新陳代謝障碍の由て起るのは、體内に於ける自家溶解性醗酵素、糖化醗酵素、ペプトン化醗酵素等の障碍にあるからで、エマナチオンは前記の如く此等の體内醗酵素の作用を催進する性があるが故に、新陳代謝病に功驗を奏するのである。

温泉浴の効驗あるのは、エマナチオンが皮膚より吸収せらるゝに因るか、或は之を含有する水蒸氣が肺臓より吸収せらるゝに因るかと云ふに、ユーラウシユ及びマイエル氏等は全く呼吸道よりの吸入に因ると云ひ、ローウエンター

ル氏等も之に和してゐる、併しストラツセル、エンケルマン氏等は皮膚より吸収せらるゝことを唱へ、又た一面に於て粘膜よりも吸収せらるゝことは、ブルリング氏等の證明せし處である、さりながら、ナーゲルシユミット氏等はエマナチオンは皮膚より吸収せらるゝもので無く、肺臓、胃腸より体内に吸収せられ呼吸及び尿便と共に再び体外に排泄せらるゝものであると云つてゐる、併しエマナチオンが、皮膚、肺臓、胃腸、いづれよりも体内に吸収せらるべき可能性あるとは實際上之を認めなければならぬ、而てエマナチオンは一定程度まで細菌を殺す力があるから、エマナチオンを含有する温泉に直ちに之を飲料浴用となすことが出来る、又た人工的にエマナチオンを有する水を製して之を注射用、器法用に供し、或は軟膏を製して塗擦用に供することも出来る、即ちエマナチオンは飲用、吸収、沐浴、注射、塗擦等諸方面に使用し得られる。

ラヂウム温泉浴には適應症と禁忌症とがある、先づ適應症としては、すべて

の慢性炎症性疾患、神経痛、膏性化膿症、腫瘍體質病（腺病、佝僂病、動脈硬化症、糖尿病、脂肪過多症）、老人及び病後の衰弱等で、禁忌とすべきものは、急性炎症性疾患、急性腎臓炎、胃潰瘍、出血等である。

最後に一言附記すべきことは、エマナチオンが動物の生命を長く延長する作用のあることである、試みに幼蟲を多數に集めて之をエマナチオンに曝らすと其の中には死する者もあるが、天賦の命數より三四倍も長最する者が多い、若し之を人間に適用することが出来たならば十五六歳の妙齡の女にエマナチオンを作用せしめると、六七十歳の老人になつても猶ほ若々して居られることになる、併し人間と幼蟲とは人に異つてゐる故に、幼蟲に於ける例を人間に適用することは出来ないけれども、併しエマナチオンが一定程度まで生命を延長する作用のあることは事實として認めねばならぬ。

喫煙史略

煙草は *Nicotiana tabacum* といへる一年生植物のことであるが、之を「タバコ」といふ因縁に就てはいろいろの傳説がある、或はヒスパニオラス人の吸煙具の名に出づと云ひ、或はメキシコのサント、ドミンコなる「タバコ」縣に發見されしがためだと云ひ、又た『廣益大草大成』には、南蠻國に淡婆古といへる女があつて、瘵疾を患つてゐたが、此の草を服して癒えたので、其の名を取つたのであると記してあるが、併し、『タバコ』なる語は、ハイチ島（西印度諸島中の島）の語なりといふ説が眞に近いやうである、而て世界の民族中、最も早く煙草を知つた者は往古より北亞米利加に住みし西印度人であつた、但し此の蠻人の煙草を發見せしは、いつ頃の年代であるか不明であるけれども、太古時代より既に之を喫してゐたことは、同國の古墳中より煙具の發掘せられし事實に徴

し推測し得られる。

煙草が始めて歐洲の文明人の知る所となりしは、千四百九十二年、コロンブスの一行が北亞米利加を發見せし時、土着の蠻族インディアンの男女が卷疊せる煙草を手にして其一端を燒燒し、他端を口にして之を吸飲せし狀を見たのが其の嚆矢である、當時コロンブスの一行は此の狀を見て土人が口から火を吸ひ込んで鼻より煙を吹かすのかと大に驚き疑つたと云ふことである、かくして煙草が歐洲人の知る處となつたから、第一に之を歐洲に移植したのが西班牙人のトレードと云へる人で、米國から煙草の種子を持ち歸り、西班牙の南部地方に移植して之を繁殖せしめた、次で隣國の葡萄牙にも移植するやうになり、同地に駐割せる佛國の大使ジャン、ニコット氏自ら之を培養して其種子を佛國に持ち歸り、フランシスコ第二世に獻上した、それは千五百十九年の頃で、かくして煙草は佛國にも移し植えられることとなつた、煙草を「ニコチアナ」とい

ふのはニコットの名に因んだものである。

これより後、煙草は他の諸國にも漸次輸入せられ、千五百六十五年には獨逸に、千五百八十六年には英國に傳つて喫煙の風を生ずるに至つた。併し十六世紀時代には醫療上にも應用し、殊に神經性疾患に賞用したが、十八世紀時代の半に至つて、ブランドルブルグの如き地方では、煙草の栽培甚だ盛んとなり、之を他の歐洲諸國に陸續輸入するので、諸國の農民は之が培養に熱沖して麥圃の耕作を怠り、其の結果麥類の價格が非常に騰貴するやうになつたので、歐洲諸國の政府は煙草耕作地の面積を制限するために嚴令を發布するに至つた。此の如く煙草の傳播蔓延する勢は恰も火の燎原を燒くが如き有様であつた。併し各國の政府は煙草流布の初に當つては其の害毒を慮りて之を抑壓禁制するに務めたのである。英國王ジェームス一世は煙草税一磅一斤を増加して六片となすべしと宣言し其の有害なることを吹聴して其の傳播と喫用とを禁ぜんとしたが、

全く徒勞に歸した。法王ウルバン八世も熱心に喫煙の害を説いて之を禁止するに努めたが、これ亦た無効に終つた。露國に於ても初めは喫煙者のあれば直ちに之を捕縛して笞刑に處し、或は其の鼻を切斷し、三犯者は斬罪に處し、又は瑞西國ベルネルの法律には喫煙を嚴禁し、又た土耳其、波斯の東洋諸國にても喫煙者を以て宗教に對する犯罪者とまで公布せしにも拘はらず、毫も之を制止することが出来なかつた。支那にては千六百四十一年、喫煙を禁止する布令を出したが、これ亦た何等の効を奏しなかつた。

以上概述するが如く各國の政府は法律を以て喫煙を禁止せんと試みたのであるが、悉く其の效果なく、却つて其の風習を増長せしむるに過ぎなかつた。禁煙の令嚴なれば嚴なる程、一層世人の反動心を高めて、嘗ては煙草を好まざりし者をも其の味を試むるに至らしめ、遂にはあらゆる階級を通じて殆ど喫煙せざる者なきが如き有様となつた。

我國にては煙草の始めて葡萄牙人より輸入せられたのは既に天正年代の頃で、最初は種子島に植えられたのであるが、併し當時は喫煙する者甚だ稀で、諸國には弘まらなかつた。然るに慶長十年に至りて更に煙草の種子が輸入せられ長崎櫻の馬場に栽培せられてより漸く喫煙の風が盛んになつてきた、而してこれより山城の花山に煙草の種子を移し、吉野に植え、次に丹波に移し植え、遂に全國に弘まるやうになつたので、慶長十三年幕府は令を發して喫煙禁止の方針を執ることゝなつた、『君臣言行錄』に『この二三年來、貴賤上下となく『タバコ』と云ふものを翫弄し諸病平癒のためとは云へども、却つて之を吸ひしものは悶絶して頓死するものあり、依て再び禁止せらる』とあるに徴すれば、既にこれより以前にも禁止の令を出だしたことが分かる、而して『諸病平癒のためといへる』記事あるより之を見れば、始めは煙草の生理的作用を利用して種々の病に實用してゐたことが推測せられる、『本朝食鑑』に『胸膈以通利、令氣舒暢、

而得一時之快云々』とあるを見ても、喫煙の由來が煙草の麻醉作用に基いたのが容易に看取せられる、それは恰も茲に述べたる歐洲に於ても十六世紀時代の頃には煙草の神經系に及ぼす沈靜作用を利用して神經性症患に實用したのと同じである。

慶長十四年の四月には更に禁令下りて江戸内に煙草を喫用するを禁じ、次で同年七月に至つて天下に普ねく之を公布した、さりながら効を奏しなかつたと見ゆて、十七年八月には復たもや煙草の禁令が發布せられ、且つ何地にも煙草を植ゆべからずとまで令せられた、併しこれでも利き目が無かつたので、元和六年又たく天下に令して禁喫煙を嚴禁し、同二年には煙草の培養を禁止し、同五年には更に前令を復して煙草の培養及び賣買を禁じた、併し到底人民の嗜好を抑壓するに能はずして、喫煙の風習は都鄙到る所に行はれ、又た需要に應じて煙草を栽培することも盛んとなり、既に三代將軍の寛永年代の末頃には、

諸國いづれの地にも煙草を植ゆるやうになつた、そこで寛文七年に至つて更に天下に令を出して煙草を良田に植ゆるを禁じた、併しこれ亦た遂に空文に終り煙草に對する國民の嗜好は到底法令を以て禁壓するに由なく、津々浦々の果てに到る迄、男女考幼に論なく、殆ど喫煙せざる者なきが如き有様となつて了つた、其碩の『娘氣質』（享保時代の作）に「昔は女の煙草のむこと、遊女の外に無かりしが、今は煙草のまぬ女稀なり」とある。

以上述べ來つた事實を見ても、洋の東西時の古今を問はず爲政者が法律を以て人間の嗜好を禁壓せんとするが如きは全く其の效果なく、却て其の反對の結果を招くに至ることが明かである、されば法律萬能論者は此の喫煙史の一斑を見ても深く反省顧慮する所が無ければならぬ。

醫學上より觀たる胎教

古代の支那にては、婦人が妊娠すると、善良なる子を得んがために、特に平素よりも起居飲食、動作を慎み、操行を嚴にし、聖賢の語を誦したもので、之を胎教と云つた、吾人の之に對する意見如何といふに、醫學上の立場から見ても胎教の重要な意義を有することは疑ふべくもない、支那にて往古之が行はれてゐたのは素より經驗上より出でたことであらうが、之を理論上より觀察しても胎教は優良な子を生まんとするものの必ず實行すべきものである。

抑々精神感動の肉體に及ぼす影響の甚だ顯著なることは實際上掩ふべからざる處で、劇しき憂愁のために頭髮の霜髪となり或は憤怒によりて突然黃疸を發し、或は驚愕によりて一時月經の停止するやうなことがある、されば妊娠せる婦人の精神感動が其の胎兒にも影響を及ぼして其の身心の發育に有害なる作用を

與へ病理的異常を惹起し得べきことは理の看易き所である、今之に關する往時の諸家の記述を見るに、其の中には荒誕無稽に近き奇聞異説も尠く無いが、併し妊婦の精神感動に因て其の胎兒の身體に種々なる發育障礙を來たし畸形を發生するやうなことは實際上可能のことと思はれる、マルブランシュ氏は或聖僧の尊像を注視して深く心を動かせし一婦人の生み落せし子の容貌が年老ひし聖僧の顔に酷似せしのみならず、其の一例の肩胛部には、聖僧の頭に載きし頭巾が痣の形となつて現はれてゐたと云ふ事實を記述したことがあり、又たヘリオドール氏はエチオピア王ピダスベスの妃ベルシナが妊娠中、王宮の庭園にある希臘の男女の神々しい雪白の大理石像を恍惚として眺め、著るしく感情を動かしたが、其の分娩せる王子の皮膚は大理石の神像のやうに眞つ白であつた。そこで王妃は王の怒りに觸れんことを恐れて分娩後直ちに之を遺棄したといふことを記述し、又たリンベック氏は分娩する五六日前に、向ひ側の家の出火し

て火焰の盛んに燃え上つたのを見た婦人が、頬の上に大きな火燒の跡のやうな一個の母斑を有せる子を生んだと云ふことを記した、此の如き異聞奇話は東西共に随分多くあつて其の中には信用の置けない者もあるが、併し妊娠中、母體の感情の激動が胎兒の發育上に有害の影響を及ぼすべきことは私共の夙に肯定する所である、又た身體上のみならず、精神の方面にも異常を招致すべきことも考へ得られる、現に冤囚保護事業に熱心なる原胤昭氏の説に依れば、立派な兄弟のある中に、唯だ一人の犯罪者の出たのを精細に調べみたるに、其の子が母胎に在りし時、父親が放蕩をしたので、母親が人知れず嫉妬を起したり心配したりした爲めであつたといふことである、されば婦人が妊娠間、其の起居動作を慎み妄りに感情を動かさず胎教を遵守することは、其の生兒に取りて甚だ須要の件である、加之、本人自身にとりても亦た肝要のことであらねばならぬ、蓋し妊娠中は、女子の身體に於ける新陳代謝機能の變化するがため、其

の影響が神経系に及び刺戟に對する興奮性の鋭敏となつてくる故、精神を安靜にして置くの要がある、而て妊婦の神経系の刺戟せられ易き結果は、屢々精神作用の變調を來たし、所謂妊娠性精神病を來たすことも周知の事實である、固より精神に病的變化の起ることはそれ程多いことで無く、レーウエンフェルトの説に依れば、精神病院に收容せる婦人患者の三%に於て、妊娠性精神病を見るに過ぎずと云ふことであるが、併し之を來たす者は初妊婦に多く、且つ主として妊娠後半期に來るものである、而して其の中如何なる精神病が最も多いかと云ふに鬱憂病(メランコリー)であつて、フールストナー氏の説に依れば妊娠精神病患者の八%、リッピング氏は八十四、四%に於て之を見るとのことである、之に次ぐものは躁病である、又たクレベリン氏の説に依れば、妊娠に因て屢々早發癲呆症の起ることがある、此の如く妊婦に於ては精神に病的異常を來たすため、自殺、他殺、放火、偷盜等の如き犯罪的行爲を演ずるに至ることがある。

此く述べ來れば、胎教の實行は常に其の胎内にある兒のためのみならず、妊婦自身のためにも甚だ重要な意義を有することが明かである、妊娠中、目に邪色を視ず、耳に淫聲を聽かず、聖賢の語を誦して其の操行を端正にすることは優良の子を擧ぐる所以の外に、妊婦自身にとつて甚だ適切なる精神的衛生となりて感情の興奮激動を防ぎ、従つて、上記の如き精神病より免るゝことが出来る、嘗て竹田宮妃殿下の王子御懷胎中、古今の英雄偉人の傳を讀み玉ひ、又茶の湯の御稽古をあそばされて精神修養におつとめになつたことは、いつか聞き及んだことであるが、ナポレオンの母も其の妊娠中ブルタークの英雄傳を耽讀したといふ話がある、いづれも胎教の旨にかなへる美事で、優良なる子を生むべき婦人の實行すべきことである。

女性の男性化

(女性の解放運動に就て)

イブセンの「人形の家」のノラが、リンデン夫人に向つて、「それでも働いてお金を儲けるのが面白く、殆ど男子のやうな氣持ちとなつた」と語る第三場中の一節は、近代の女性の男性化しつゝある理由の一を明示するものである、今や文明の進歩と共に、社會の經濟的的制度も擴張して、女子に適する適當の職業が出来たのみならず、女子教育の發達は男子の従事しつゝある職業の範圍にも足を入るゝやうになつたので、女子は是れ迄のやうに男子に依頼するの要なく進んで自活獨立すべき職業を求めて自己の運命を開拓することゝなつた、近代

の女性が男性化するやうになつたのは、つまるところ、彼等が經濟的に獨立するこゝとが得られる様になつた結果である。さり乍ら、一步を進めて觀察を下したならば、女性の男化するのは決して慶賀すべき現象とは言はれぬ、抑々近世の物質的文明が人間の生活をして益々自然より遠ざからしめた結果、病的人物が多く腫出するやうになつて、人間の變質を來たしたことは顯著なる事實であるが、これと共に男女の性別も閑却無視せられて男性化する女子の次第に多く現はれてきたのは、全く自然に反せる現象であると謂はなければならぬ。吾人の見る所を以てすれば、眞の文明なるものは男女兩性の別が益々顯著となり、従つて其の自然より與へられたる特性の愈々明白に發揮せられることであらねばならぬ。されば男性化する女子は、よしや近代文明の産物であるにしても、それは、畢竟非自然的の現象であつて、決して喜ぶべきもので無い、吾人固よりルツソーのやうに、近代の物質的文明

を呪咀するか如き者ではないが、併し男性化しつつある女子の次第に増加せんとするを見ては、彼等に對して自然に還へれよと言ひたくなる。

男女は其の身體及び精神の兩方面に於て著るしい懸隔のあることは固より掩ふべからざる處で、女子の身體が筋骨の發育に乏しく、又た知力の概して薄弱なることは到底男性に對抗すべからざるを示してゐる、固より教育の進歩により更に女子の知識を開發するとしても、併し之と同時に男子の知能も益々進歩してゆくから、女子が到底男子に追ひつくことの出来ぬのは論を俟たざる所である、よしや假に一步を譲つて新らしい女達の言ふが如くに、今後の努力によつて女性が其の體質に於て又た知能に於て男子と雁行し得るやうになつたにしても、男子と同等の地位に立ち、學術、政治、經濟等の諸方面に花々しい活動をなすことが出来ない根本的原因がある、それは何かといふに、女性固有の生殖腺の影響である。

大病理學者ウィルヒョウは「女子の身心のあらゆる固有性、即ち吾人が眞正の女子に女らしいものとして嘆美尊敬すべきものゝ凡ては實に卵巢の附庸である」と云つた、洵に此の言の如く、女子の女らしき所以は、其の生殖腺たる卵巢の存在に基づくので、其の血液中に分泌する處の「ホルモン」は女子の肉體及び精神の兩方面に一定の影響を及ぼし、以て女子に特有の體質及び心性を發現するのである、それ故、若し女子に就て卵巢を摘出して其の代りに男性の生殖腺たる睪丸を移植したならば、其の女性の體質及び精神は共に男子の如く變化してくる、この事實はスタイナーの動物試験に徴しても、明白なる處である、されば極端に論じたならば、男性と同一の位置權力を獲得せんとする新しい女達は、手つ取り早く外科醫に頼んで生殖腺を入れ換へて貰ふのが一番捷徑である、併し此様なことは固より人間に就て行ふことは出来ないから、矢張り固有の卵巢を所持せねばならぬ、既に卵巢の一生涯存在する以上は、其の體

質及び知力の男子に比して遙かに劣るのも致方が無い、而て女性の身心兩方面に著るしい影響を及ぼして其の活動を阻碍するものは妊娠と月經とである、但し自活獨立する女性或は避妊する女性と雖、獨り月經ばかりは之を免るゝことは出来ない、月經中、神経系の著るしい興奮發揚し、或は抑壓せられて意識の障礙を來たし、種々なる心理的變化を發起することは女子に於ける特徴の一である、加之、月經間に於ては身體の生活現象に著るしい變動が起るもので、即ち月經の來る前には筋肉の力、呼吸作用、體温等の如き生理的機能には殆ど其の絶頂に達するが、月經の初期より下降し、月經間には最も下降し、それより再び昂進して次回の月經期前に至り再び其の頂點に達する、此様な現象は實に女子特有のもので、女子の活動すべき青春期壯年時代に於て右の如く心理的及び生理的變動を發起する月經を有することは、益々女子をして社會的活動を困難ならしむる因子である。

生物學上より論ずれば、女子の女子たる所以は其の大部分負擔する生殖の任務にある、女子は新個體を生産し哺養して種族を永遠に保続すべきものである、此の任務を全ふせんがために、自然は女子に男子よりも遙かに複雑なる生殖機關と乳房とを與へた、女子が筋骨の發育弱くして脂肪に富み、其の體力旺盛ならずして靜止的であるのも、詰る處は妊娠分娩及び哺育といへる重要な生殖任務を負擔せる結果に外ならぬ。又た女體に於ける臓器の大部分が小兒型に留まり、知力の發達が不十分であるのも、生殖機能の基礎とも云ふべき卵子の產生及び月經の定期性に現はるゝかため、體力の之れに消耗せらるゝに因るのである。

此の如き次第であるから、女子教育のいかに進歩して女子の知識的方面の著るしく開發せらるゝやうになつても、其の固有の生殖腺が生理的機能を營み、月經妊娠の繰りかへさるゝ以上は、到底男子と同等の職業に従事し同一の社會

的運動をなすこと能はざるは自明の理である、此の事實より推して論ずれば、女性はその本来の性質上、結婚して子を備け、男子の保護の下に立つて安全に其の子を哺育養成すべきものである、女子が自活獨立して自然より課せられたる分娩哺育の重任を遂行することの出来ぬのは實に變則變態の事象と謂はねばならぬ。

吾人は固より近代の女性に向つて、これ迄の女のやうに必ず良妻賢母となれよと迫る者でない、生存競争の愈々劇しくなるに伴ふて自活獨立の女性の輩出するやうになるのも、時代の趨勢の然らしむる所であるから、吾人は女子か女子相應の職業を求めて之に従事し、一生獨身で暮らそうとするものを見て、決して反對するのでは無い、さりながら女子が其の本来の稟賦を忘れて男性化せんとする近代の傾向に對しては斷じて反對するものである、殊に其の本来の性質に適せざるに、物好きにも男子の領分にまで立ち入り、法律政治等の方面に

も参加して男子同等の位置權力を獲得せんとするが如き解放運動に對しては、之を女性の自殺と看做して其の非を鳴らさねばならぬ。

女性は何處までも女性である、其の生殖腺の存在する限りは、どうしても男性と同等となることは出来ない、女子の知識がいかに進み、其の職業が如何に擴がつても、其の固有の生殖腺が生理的機能を営みて、「ホルモン」を血液中に輸入する限りは、到底男子同等の身心とはなれない、既に然りとせば其の行爲能力の上に於ても男子と同等たること能はざるは初めから解かりきつた話である。

女子が眞摯たる學者たること能はず、公正なる政治家となると能はざるは其の精神的生活が感情によつて左右せられ、又た暗示に感じ易くして無批評無判斷に刺戟をそのまゝに受け入れる傾向の強いからである、クレベリン氏の説に依れば女子の七十%まではヒステリーであると云ふ、恐くは誇張の計數である

まい、女子は天性は伶俐であつても、其の精神の働きは推理的よりも直観的であり、感情的であつて、眼前の利害を見るには敏なるも、思ひを遠くに馳せて大事を決断するが如き能力や、時運の機敏を洞観して之に順應する新企畫を講ずるが如き能力に至ては大に缺けてゐる。看よ女性が政治方面に手を出して失敗の歴史を貽したる實例の夥からざるを、姑らく和漢の女傑に就て之を擧ぐれば、支那では呂后、則天武后、西太后等の如き、我國では藤原薬子、美福門院平政子、足利富子、淀君の如き即ち是れで、いづれも政治の方面に關係して世を誤り國を亂した、女傑にして猶ほ此の如し。況や平々凡々たる女性に於てをやである。

これに反して女子に固有なる特性は愛である、熱烈なる愛を生命として己を愛する者のため殉ずるのが實に女子本來の特質である、ゲーテ、シルレル、近松等の戯曲作品にあらはれたる女性には幾分か作者によつて理想化せられ美化

せられたる處があつても、渾身愛の精神に充實し、人生の枯野に咲ける薔薇の花とも見るべきものか則ち女性である、蓋し新個體を生産して種族を永遠に保つべき任務を負へる女性が己を愛する者のために一身を捧げて悔ひないのは當然の現象である、此の如く女子の精神的生活は感情的であるから、詩人文學者として女流中に成功する者の少く無いのも決して偶然で無い。

男女が其の身心の能力に於て顯著の差異のある生理及び心理上の事實より、女性を最も理解し、最も多く研究してゐるのは實に醫學者である、大病理學者ウイルヒョーは嘗て婦人問題に論及せし時、男女は其の身體及び精神的生活の全然相違せるものであるから、決して同等に取扱ふべきものに非ることを論じ大解剖學者ワルダイエルは解剖上の事實を基礎として、女子教育は女性の身心に適するやうに行はなければならぬことを述べ、併せて女性の解放運動に反對した、又た精神神経病學の泰斗クラフトエビングは近代の女子教育が女子の身

心に過重なることを嘆じ、神經衰弱、肺病等に罹る者の女子に多きことを擧げ且つ女子教育の知育に偏して女子に適切なる情教育の不足不完全なることを示し、婦人解放運動の如きは女子のために甚だ有害不合理なる所以を痛論し、同じく精神病學の大家なりしメビウスも、婦人は男子と小兒との中間に位するもので、女子をして其の腦髓を多く使用せしむる近代教育の有害なる所以を論じ、女子の眼界の狹隘なること、判斷力の不公平なること、創造力に乏しくして多大の思考を要すべき困難なる精神的作業に不適當なることを論證し、婦人解放に絶對的反對なる所以を深刻に力説した、又た婦人科學の泰斗ルンゲも、女性は身體に故障を生じ易く、生理上に於ては決して男子と同等に取扱ふことは出来ない、女子は其の身心の状態から見れば、結婚すべきもので、男子の保護を受けねば正當に生活し得られるもので無いとまで痛論した。

女子も固より人間である、さりながら其の男子と同じく人間たり、社會の一

員たるの故を以て男子と同等の權利を與へよと主張するが如き解放論者の所説は、極端なる平等思想の上に立てる抽象的議論に過ぎない、男子と女子とは生理的及び心理的差異に従つて其行爲能力をも異にする以上は、勢ひ男女の個人的及び社會的地位にも懸隔を生じ、従つて又た其の義務責任にも相違があり、それだけ其の權利にも異なる處を生ずるのは自然の成行きである、兩性間に於ける自然の差異を破壊して何處に正當の自由と平等とを求め得べき。

是を要するに近代の女性が男性化して男子と同一の權利及び地位を要求し、自活獨立して男子に對抗せんとするが如き解放運動は、生理及び心理上の事實を閉却無視せるもので、吾人の毫も贊成する能はざる處である、但し女性の自活獨立は今日の社會に於て誠に己むを得ざる者で、生存競争の益々劇しくなり結婚の非常に困難となるの結果、女子が自活の道を求めねばならぬやうになるのは自然の趨勢であるから、此點に於ては吾人は寧ろ多大の同情を寄するもの

である、併しそれは女子が其の性質に適する職業にのみ従事し、男子の領分に侵蝕せざる限りに於てある、然るに若し女子が其の天賦の資質をも顧みず進んで男子の領分にまで立ち入り、科學、政治、法律等の方面にも参加して男子同等の地位及び權利を獲得せんとするが如き新しい女達の行動に對しては斷乎として其の無理を攻めなければならぬ。

今日解放運動に従事する女性の中には吾人より之を見て「男性的女子」と認むべき異常的の女性の尠くない様に想はれる、此の如き異常的の女性が口に筆に男子對等の權利を主張するのは敢て恠しむに足らざる次第であるが、彼等の言に乗ぜられて解放運動に加はるが如き女性こそは、實に自己を知らざるの甚しきものである、聖哲ソクラテスは『汝自らを知れ』と教へた、女性たるものは須らく能く自らを知り、女性の男性化は近代の物質的文明に伴ふ所の社會經濟組織の缺陷に起因せる變則的現象なることを顧慮し、男子と對抗せんとするが

家庭新知識 第二輯終

如き突飛無謀の行動に出でないやう、深く自重しなければならぬ。

大正十年三月十日印刷
大正十年三月十五日發行

家庭新智識(2)
定價金七十錢

著者

田中祐吉

大

發行者

東京市日本橋區數寄屋町一番地
濱井松之助

社

印刷者

東京市神田區西小川町二丁目六番地
宮田龜六

刷



發兌

東京日本橋區數寄屋町
振替東京一三七五番

大阪屋號書店

電話本局 四三七八九番

前大阪醫學校病理學教授

田中香涯先生著

發兌

東京日本橋數寄屋町

大阪屋號書店

振替東京一三七五番

(五版) 間違だらけの衛生

定價壹圓九拾錢
書留送料拾五錢

(三版) 智識と趣味 人體に關する面白き話

定價貳圓八拾錢
書留送料拾七錢

(近刊) 科學上より見たる 靈

と

肉

(未定)

醫學博士 額田豐先生著

(三版) 病弱を轉じて健康へ

定價金貳圓
書留送料拾五錢

醫學博士 額田豐先生講評

獨逸アドルフユスト原著
寒川鼠骨先生譯

(六版) 天然生活法

定價壹圓八拾錢
書留送料拾五錢

60
702

終

